

マラヤ・インド人のアイデンティティ模索

——一九二〇—三〇年代の初期ナショナリズムの分析——

田村 愛理

一 はじめに

一九七九年マレーシアで、マレー人過激派グループによるヒンドゥ寺院連続襲撃事件が世情を賑せた。クルリン(Kulirin)事件と呼ばれるこの事件は八月二日未明クアラランブルの北クルリンのヒンドゥ寺院を大学生三名、教師二名のマレー人グループが襲い、警戒のため張り込んでいたインド系住民との乱闘の結果、グループの内四名が殺されたものである。彼等は現在若いマレー人エリートの中に浸透しつつあるイスラム精神への復帰をスローガンとしたダクワ運動¹⁾の中の過激派のメンバーであり、この事件までにマレー半島の二八のヒンドゥ寺院の像を破壊して回っていたのであった。

この事件は一九六九年のマレー人による中国系住民襲撃事件²⁾—五月—三日事件—以後一〇年間表面上は沈静しているかにみえた人種間抗争の再燃であった。勿論この事件は規模に

おいても、襲撃の対象においても五月—三日事件とは違っており比較にならない。しかし複合国家マレーシアが政治的危機を孕んでいるという事実を白日の下にさらした点で、事件の持つ重要性は勝るとも劣らないものであった。なによりも事件の公表が政府の圧力により数日間伏せられていた事は、宗教対立という現象で現われたエスニック集団間紛争が、現存のマレーシアの脆弱な政治社会構造を浮き彫りにしている事を意味している。一九七〇年の国勢調査による西マレーシア全体(サバ、サラワクを除く)の民族構成はマレー系五三%、中国系三五・四%、インド系一〇・六%、その他〇・九%である。こうした人口構成を持つマレーシアという複合民族国家において、エスニック集団間紛争は国家存亡の要となっているのである。

こうしたマレーシアが持つ問題は一九七〇年以降アメリカにおける「新エスニシティ理論」³⁾の抬頭と共に社会学者、政

治学者の興味をひいてきた。しかし本稿は、今やほとんど所与のものとして扱われているエスニシティ〔石川 1988: 38〕が実は集団のアイデンティティ模索の選択結果であり、政治社会状況の変化に応じる可変概念であることを、マレーシアにおけるインド人移民のナショナリズムをケース・スタディとして証明しようと試みたものである。

二 問題の所在

マレーシアの複合社会はイギリス植民地経済の要請に基づく近代の政策的な移民によって人為的に出来上がったものである。このような国家におけるエスニック集団間紛争を、民族による階級権益格差の大きい複合民族国家がもつ政治的に避け難い人種間抗争のメカニズムという面だけをとりあげてそこに焦点を合わせて考察することは避けるべきである。なぜならこうした見方は問題を人種問題という袋小路に追いつめかねないという意味で危険だからである。むしろ複合移民社会マレーシアにおける紛争の原因としてのエスニシティは、新しい移住空間において必然的に起るアイデンティティ獲得過程としての諸集団のナショナリズム運動との関連で捉え、研究する視点が重要である。マレーシアの政治史研究ではマレー人のナショナリズム運動⁽¹⁾については研究書も出ており、又中国人の政治運動についても論文が数多く出されているが、インド系住民のナショナリズムについては関心が薄

く、ほとんど研究されていない。そこで現在マレーシアで再び重大化しつつあるエスニック紛争におけるインド系移民の問題を、彼等のナショナリズム運動をアイデンティティ獲得過程と規定し、これを追うことにより、紛争の根源が本当にエスニシティの差異にあるのか探ってみることにしたい。特に本稿ではその出発点となる、一九二〇—三〇年代におけるインド系ナショナリズム運動に焦点を当てる。

前述のように、マレーシアに関する専門書の中で、インド系住民のナショナリズムに触れている部分は極めてわずかである。それらによると、インド系住民の政治活動は一般に不活発であったとされ、その原因としては移民インド人の多くは出稼ぎであるため母国インドに政治的一体感を覚えていたこと、インド人内部に地域別、カースト別、宗教別の多くのグループが存在していたため、インド人コミュニティがまとまりに欠けていたこと、などがあげられている〔萩原 1973: 51, 生田 1977: 265, Thompson 1955: 98〕。

これらの事実是一面の事実としては確かであろう。しかしそれは、インド系住民の政治運動をインド人コミュニティの外から眺めた結果である。我々がインド系住民のナショナリズムについて考えようとする際には、このコミュニティの内部から見た分析が必要である。それらはすなわち移民したインド人はインドの独立運動の流れの一部として自分達を考えていたという〔萩原 1973: 38〕が果してそうであったの

か。例えもしそう考えていたとしても、それは複雑多岐にわたる移民インド人のどの部分か。そしてその運動の実態はいかなるものであったのか、等である。こうした分析をへて始めて我々はインド系住民の政治運動が不活発であったのかどうか結論づけ得る。

人間はある集団の一員たることを自覚すること—アイデンティティ獲得—により社会的意味を与えられ自我が安定するといわれる〔エリクソン 1977 vol.1: 36〕。そして移民という現象は従来の生活からの分離を意味するので、ここに当然心理的不安定要因による葛藤が各人の心に生じると予想される。葛藤が何らかの形で心理的に整合されない限り、人は正常な精神を失なっていくことは、精神病理学上明らかにされている⁽⁵⁾。初期の移民形態において、事実としたら驚くべき高い死亡率（八〇—九〇%）が誌されている〔Sandhu 1968: 88〕のも衛生状態のみならず、こうした心理的不安が背景にあったことも考慮されなければならない。このインド人達が現在のマレーシア複合国家の一員として生きているという事実を残してきたからには、恐らく中国人コミュニティ、マレー人コミュニティと同じように、なんらかの心理的整合過程としての、それなりに活発なアイデンティティ獲得のための政治活動があったはずである。それ故にインド系住民の政治運動を移民のアイデンティティ獲得過程として規定することは意味があるのである。

時代的には特に、一九二〇年代後半—三〇年代の政治活動に焦点がおかれる。この時代は大恐慌を乗り越え、団結の必要を感じ始めたインド系中産階級が政治活動に目覚め、その結果はじめて政治組織マラヤ・インド人中央協会（Central Indian Association of Malaya: CIAM）が設立された時である。インドでは独立運動がはげしくなる一方、マレー人ナショナリズム、中国国民党の動きも盛んになった時代でもあった。

三 移民の構造

(a) 労働者階級の移民

イギリスは一九世紀初頭よりシンガポール、ペナン、マラカの海峡植民地を足場にしてマレー半島に進出し、次々と各地のスルタンから統治権を奪い、一九一四年までにはマレー半島全土を支配下においた⁽⁶⁾。イギリスにとつてのマレー半島の魅力はその経済的価値の高さにあり、なかでも錫とゴムが注目された。そして錫鉱山開発に伴って中国人が、ゴム・プランテーション開発に伴ってインド人が政策的に移民された結果、マレーシア複合社会が形成されたのである。

植民地経済と不可分のプランテーション経営は、初期には砂糖やコーヒー等も試みられたが、特に成功したのはゴムであった。ゴムの需要は一九世紀末に自動車産業の発展に伴って増加し、価格も上昇したため、英本国から投資が盛んに行なわれるようになった⁽⁷⁾。ゴム・プランテーションが始まった

のは一八九五年スランゴール州においてであったが、九八年に半島縦断鉄道が敷設されると次々にゴム園が開拓され、ゴム園ラッシュが起った。このゴム・プランテーション労働者として移民されたのがマレーシアのインド系住民の八〇%を占める南インドのタミル人であった。(表一参照)

しかしなぜ特に南インドのタミル人が導入されたのであろうか。「タミルが単調なゴム採取の仕事に適していた」(生田 1977: 276) からであるという説明はあまりに素朴すぎる。なぜ移民現象が生じたのか、そしてなぜそれは南インドの特定の地域に集中したのか、という問題は労働者の輸出・輸入両地域の社会・経済状況を分析して、始めて解答が得られるものである。

まず輸入したマラヤ側における最大の理由は、マレー半島が非常に人口の稀薄な土地であったことである。当時この人口の大部分を占めていたマレー人は、すでに固有の農村経済社会の中に生活しており、植民地体制下のプランテーション経営において何よりも重要な安定した、安価かつ豊富な労働力供給源としては不向きであった。かくして労働力輸入は植民地官吏の急務となったのである。

アフリカ黒人奴隷廃止条令が一八三八年イギリス本国で決議された後、これに代るものとして当時考慮された移民労働力には日本人や韓国人も含まれたが、結局採算がとれそうなのは中国人、インド人、ジャワ人であった。

中国人は既に錫鉱山の労働力として流入しており、勤勉であるという評価を得ていた。しかし、彼等の同郷者組織^{II} 幫どうしの抗争が絶えず、警備に要するコストの問題と、中国人移民数の増加により人口構成バランスが崩壊する危険性^{III} がマラヤ植民地政府を慎重にさせた [Sandhu 1969: 58 Weld 卿の言]。ジャワ人はオランダ植民地体制下にあり、一八八七年よりジャワ島以外へのジャワ人移民は禁止されていた。結局残ったのが同じイギリス植民地下のインド人であった。しかし北インドの諸民族は警察力として植民地政府の需要があったため、労働力が豊富で気候がマレー半島と似ている南インドのドラヴィダ系民族が注目された。⁽⁹⁾ その中でもマドラス州の低カーストのタミル人がプランテーション労働力として最適とみなされるに至ったのである。

次にインド側の事情はどのようなものであったろうか。一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのマドラス州総人口の五分の一はアンタツチャブルと呼ばれる被抑圧カーストであった。絶対数で見れば一八九一年に五〇万から百万人程度のアンタツチャブルがいたが、一九二一年にはその数は、三百万人を越えるに至った [Sandhu 1969: 49]。彼等の多くは農奴として土地に縛りつけられ、最低生活を余儀なくされていたので、この境遇から脱け出るには移民するしかなかった。また季節農業労働者も、年に四―八カ月雇われるのみで、日当賃金は一八九〇年で二―四ペンス、一九二〇年でも四―六ペ

ンスにすぎなかった〔Sandhu 1969: 41〕。他方マラヤのゴム・プランテーションの賃金は最低でも二倍はあったため、慢性的な飢饉状態から逃れようと移民人口は数を増した。実際問題として、一九二〇年から一〇年間にプランテーションに流出したタミル人の内の四〇%がアンタッチャブルであったと言われている〔柳沢 1976: 2357〕。

アンタッチャブルを中心としたインド人移民は、初期には「負債制」により、二〇世紀に入ってから「カンガニ制」および「補助移民制」により行なわれた。これらの移民制度について若干説明しておこう。

初期の負債制とは雇用主（主に砂糖プランテーション経営者）がインドの代理店（イギリス資本）を通して渡航費など当座の支金を移民希望者に負債として前貸しし、三―五年契約で労働者を狩り集めるものであった。⁽¹⁰⁾ この制度による移民は劣悪な条件下で行なわれ、死亡率も「二」で述べた如く異常に高かった。その結果一八七七年に至り、マドラス管区政府は移民保護官をおき、移民制度を政府監督下においた。しかし密貿易は絶えず、インドにおいてはナシヨナリストの非難的となった。マラヤ側も負債移民の低い労働効率を認識し、さらに主たる需要源であった砂糖プランテーションが下火になったこともあって、一九一〇年にこの制度は禁止されるに至った。

次に、砂糖プランテーションと比較して質の高い労働力を

必要としていたコーヒー園やゴム園の経営者達が一九世紀末から採用した移民方法がカンガニ制である。これは雇主から委嘱を受け、インドの郷里に帰って近隣から親類縁者などを労働者としてマラヤへ連れ帰って来る役目をする者が、タミル語でカンガニと呼ばれたことに由来する。⁽¹¹⁾ 南インドの状況を熟知する移民が徴募に行くので自発的で質の高い労働力が得られるので、この制度は大いに利用された。特に本稿の視点から重要なのは、家族ぐるみの移民が増大したため、次第に女性移民の比率が上昇し、⁽¹²⁾ インド人コミュニティの形成に大きな役割を果たした点である。また補助移民制とは政府が移民に渡航費を前貸しし、移民させる方法であるが基本的に自由意志による個人移民である。

二〇世紀に入ると急速に成長したゴム工業の需要を満たすため、効率の高い労働力確保はますますマラヤ側の関心の的となった。一九〇七年プランテーション経営者とマラヤ連邦州政府官吏（ヨーロッパ人）とから成る移民委員会が設立され、官民一体となって労働力確保にあたった。また経営者達により移民徴募を一括負担するインド移民基金が設立された。

こうしてインド、マラヤ双方の植民地事情が相まって、主に南インドのタミル人をマレー半島のプランテーション労働力として移民させる公的な政策が一九世紀末から二〇世紀初において確立し、移民は両政府の干渉管理下、組織的に行な

われたのである。⁽¹³⁾

(b) 中産階級の移民

「我々が必要としているのは、負債労働者としてのインド人移民であり、自由民ではない。」という Hyabg 卿の言 [Kondapi 1961: 7] が示している如く、植民地マラヤが何よりも必要としていたのはプランテーション労働力であった。従って中産階級を構成する教育を受けたインド人の移民は、労働者の如く政策的組織的に行なわれた訳ではなく、縁故を頼って個人的に漸次新開地マラヤへ職を求めてきた。そのため記録が残されておらず、出身地・カーストなどを統計から知ることはできない。中産階級インド人の移民が始まったのは二〇世紀初頭からで、彼等は商人、医者、弁護士等専門職及びマラヤ連邦州(FMS)政府の下級官吏であり、全インド人移民人口の三五%弱である [Sandhu 1969: 117]。

まず下級官吏について述べると、植民地体制が整うに当たって植民地政府は英語の使える下級官吏が必要となってきた。すでに当時インド植民地政府は、北セイロンのジャフナに高等専門学校を設立し、下級官吏養成機関として機能させていたが、彼等の内の一団の人々が一八九〇年代にFMS政府に雇われ、以後その縁故によって下級官吏ポストにおいてセイロン・タミル人の占める率が非常に高くなった⁽¹⁴⁾ [Arasa-ratnam 1970: 33]。彼等は主に鉄道、郵便、会計等に配置された。二〇世紀に入るとマラバール海岸地方の高等専門学

校を出たマラヤラム人や、タミル人が職を求めてマラヤに移民してきた。彼等はヨーロッパ経営の会社やプランテーションの下級書記等の民間部門に雇用された。

こうした事実の背後にはインドにおける高等教育修了者の就職難があった。まして新開地の俸給はインドに比べて四倍という高給であったため中産階級の流出が始まった。この傾向を止めるべく、インド政府は一九三四年インドの新聞紙上でマラヤ移民希望者へ警告を発表するなどの流出防止策をとったが、マラヤ政府とのかねあいもあって移民禁止の措置はとれなかった [Nair 1937: 106]。

また北インドのシク教徒やパンジャブ人がインドの植民地政府で果たしたと同じく、警察力として、また鉄道の技術者として雇用された。

次に商人は北インドのベンガル人、パールシー教徒、シク教徒、シンド人、マールワリー人、グジャラート人、南インドのマラバール海岸地方のタミル人イスラム教徒やヒンドゥー教徒のチュティア等である⁽¹⁵⁾。これらの中でマラヤ経済に比較的重要な意味をもったのがタミルのビジネスカーストであるチュティアで、中でもマドラス州ラムナドゥのナトゥコッタイ・チュティアである。チュティアとは元来金貸しのカースト名である。マラヤでは彼等はスルタン、貴族、マレー農民等を相手に掛け売りを行っていた。一九三〇年代までに彼等は主要都市に分布し、農地、ゴム園、市街地等を買ひ、

特に世界恐慌期には土地を抵当に金を借りたマレー人の土地の多くを掌中にした。第二次大戦前のインド人所有地の大部分はチュティアに属する。⁽¹⁶⁾チュティアはビルマにおいては大いに勢力を伸長したが、マラヤにおいてそれ程発展しなかったのは、中国人という商売敵があったことその他にイギリス植民地政府によるマレー人保護政策がとられていたからである。たとえば、一九三一年には土地所有制限法が制定され、市民権を持たぬ非マレー人の二五エーカー以上の土地所有が禁じられたが、この時債務不払いによって抵当地を没収することは一時的に禁じられた [Mahajan 1960: 107]。

第三に知識人及び専門職グループは、官吏、商人よりさらに多岐にわたる出身地から個人々人縁を頼って移民してきたものであるが、全体的にはタミル人が占める割合がやはり多い。彼等は弁護士、医者、あるいは教師としてマレー半島の諸都市に集中した [Sandhu 1969: 116]。

こうした移民の過程は一九二〇年代初期のインド系住民の社会に、次のような特徴を生み出したのである。

- ① プランテーションの労働者階級と中産階級インド人との間の無交渉
 - ② 中産階級内部における異集団間の無関心
 - ③ それと同時に下級官吏のポスト争いから生じたセイロン系タミル人と南インドのタミル人との対立
- これらの特徴は次節で述べる移民インド人のナシヨナリズム

ム形成に大きな制約条件を与えたのである。

四 マラヤを向いた移民インド人のナシヨナリズム

ム運動

プランテーション労働者として移民してきた下層階級インド人の多くは、三十五年の出稼ぎであったし、家族連れで長期に滞在することになる労働者も、まず自分達の地位向上に関してはその子弟の教育を考えたのみであった。彼等はエステートという隔離された世界の中で働いており、また雇用主達も彼等がエステート外の社会の動きに触れるのを当然好まなかった。従って、一九二〇年―三〇年代の政治運動の母体となつたのは中産階級のインド人であった。

異集団間の交際がほとんどなかった中産階級インド人の間にも、移民人口が増し都市の集住率が高まるにつれ仲間を求めようとする動きが出て、各都市で二〇世紀に入るとインド人協会が結成され始めた。これを促したのは、一九〇九年クアランプルのインド人商人、医者、弁護士、官吏又私企業の役員等で結成された「スランゴール・インド人協会」である。同様のインド人協会はイポー、クラン、ペナン、マラカ、ヌグリスンビランに結成され、一九二三年にはシンガポールにもできた。これらの協会の主目的は親睦であり、メンバーにレクリエーションを提供することであった。インド固有の様々な祭は勿論祝われ、交際の機会となったが、同時に

その構成メンバーの性質上、植民地政府の記念行事も盛大に祝された。初期の協会は政治活動を全く行わず、植民地支配体制にきわめて忠実な団体であった。¹³⁾ こうした社交をのみに中心活動とした協会は一九一〇年—二〇年代にマレー半島の各都市に次々と誕生しては又次々と消滅していった。かろうじて生き残った協会の活動も、また押し並べて非常に不活発であったという共通した性格をもち、娯楽提供の他はインド人社会に何の影響も与えなかった。

初期の協会活動が不活発であった最大の原因は、当時の協会メンバーたる中産階級インド人の内面に観察される無気力とでもいふべき精神状態に求められるのではなからうか。あるインド人は当時のインド人社会について次のように書いている。「一般にマラヤ存在の平均的インド人の視野は狭くて表面的であり、将来を見通す力もない。それどころか無気力で、すべてに無関心で自分達の繁栄についてさえ努力しようとしなう」[Arasatnam 1970: 83]。

一九三〇年までのマラヤのインド人中産階級はインドにおける彼等の同胞が強く影響を受けていたイデオロギーや政治運動とは無縁であった。これは海に隔てられてコミュニケーションが円滑にいかなかったこともあるが、マラヤ植民地政府がインドのナショナリストの入国を許可しないという政策をとったためでもある。また移民した中産階級インド人達もマラヤの他のコミュニティと交際することはほとんどしな

った。

しかし、こうした新移住空間における現実とインド移民の従来のアイデンティティの接触不良というべき無気力による孤立が嵩じて、かえって中産階級内部に過度のアイデンティティ期待（自意識）を生み出す土壌となったのである。このアイデンティティ期待はインドへは向わなかった。なぜならこの時期の中産階級インド人は移民インド人の大部分を占める労働者（クーリー）インド人と自分達とは違うのだという事実を他のコミュニティに見せつけたい気持の方が強かったからである [Arasatnam 1970: 83]。それは中産階級自体のマラヤ社会における上昇志向という形をとって現われた。

ところで、植民地政府は非ヨーロッパ、非マレー人に割り当てた数少ない行政関係のポストの内、インド人のポストをセイロン・タミル人をもって、ヒンドゥ教徒インド人の代表者としていた。¹⁴⁾ で述べた如く、セイロン・タミルは早くから下級官吏として登用された結果、そのほとんどが中産階級に属するホワイトカラーであり、南インド移民に対し優越感を抱いていた。一方後から職を求めて移民してきた中産階級南インド移民は、あらゆる政府のポストでセイロン・タミルと競合関係に入り、両者の感情悪化は只ならぬものになったのである [Sastri 1937: c104]。協会活動にヒンドゥ、イスラム、キリスト教徒の別なく参加していた亜大陸出身のインド人の中産階級移民は、インド人内部の各コミュニティ

からの代表制を認めず、セイロン人をして移民インド人の八〇%を越すヒンドゥ教徒の代表とするという植民地政府のやり方は、インド人分離の手段であると解釈した (Arasaratnam 1970: 86)。協会はこれに反対するために、インド人代表者をマラヤ連邦州議会に送ることを決議したのである。しかし、実際の背景はセイロン人と他の中産階級インド人の利害対立である。

こうしてマラヤ社会で自分達が正当に代表されていないという不満は、連邦議会へのインド人代表者選出の要求となつてあらわれた。一九二三年にペナンの弁護士 P. K. Nambiar が海峡植民地の議会 (Legislative Council) に指名されたことがきっかけとなり、同年マラヤ連邦州でもスランゴール・インド人協会が中心となつて会議を開き、連邦議会に代表者を送る決議を行ったのである。総領事 Guillemaud 卿は善処を約束したが、それが履行されたのは五年後の一九二八年であり、クアラルンプルの弁護士 S. N. Veerasamy が代表者に指名された。さらに一九二九年にプランテーション所有者 Louis Thivy がペラ州の議会の代表に、一九三二年には医学博士 S. R. Krishnan がヌグリシンピラン議会の代表に指名された。

換言すれば、ここで遅れて来た亜大陸出身の中産階級インド人が求めたのは、ホワイトカラーとしての移民インド人の地位向上であつたのである。そのための具体策が、インド人

代表者を議会へ送る事であつた。そして彼等は①非マレー人差別政策への抗議、具体的には市民権の獲得、②官吏登用機関としてのインド人子弟のための英語学校設立、③上級官吏登用におけるインド人の参加許可、等を目指し、政府に訴えるという形で運動を展開した。ここで注目すべき事は、この段階で多岐にわたる出身地、カーストのインド人中産階級が、中産階級という自己アイデンティティの確認下、セイロン人に対抗して政治的に一つにまとまり始めたことである。そして、これらの要求は②に典型的に現われている如く、マラヤ定住を意識した中産階級インド人が、子弟の将来を考えてインド人の地位向上を要求しているということである。

しかし、イギリスはその支配を①スルタンを頂点とするマレー社会の伝統の擁護、②マレー人の行政面への登用、③移住民族の非政治・行政領域への固定化等を通じて浸透させていた。一九二七—三〇年のマラヤ連邦州の高等弁務官 Clifford は、最終的にはマレー人スルタンの神聖なる地位を確認し、移住民族による民主主義的要求を否定するというイギリスのマラヤ統治原理を公的宣言により再確認した (萩原 1967: 307)。

一九二八年に連邦議会代表に指名された Veerasamy を中心とした初期のインド人ナショナリズム運動は、こうしたイギリス支配体制に正面から反対するものではなく、市民権を獲得し、イギリス支配体制に組み込まれる事によって、マラ

ヤでのインド人の地位安定を図ろうとするものであった。例えば、一九三二年、イギリスから植民地省次官 Samuel Wilson 卿がマラヤを訪問した時も、Veerasamy を代表とする一団が卿と面会し、市民権獲得の善処を求めている [Arahnam 1970: 89]。

一九三二年、マラヤで初めての全インド人的組織「マラヤ・インド人協会 (Malayan Indian Association: MIA)」が設立され、市民権獲得を中心テーマとするインド人中産階級ナショナリズムは昂揚期を迎えた。この背景には一九二〇—二七年のマレー連邦州の高等弁務官 Guilleminard が唱えたマレー連邦州の州権拡大を認めマラヤ連合 (Malayan Union) への改変策に伴って、マレー人優遇政策がさらに進められ、インド人の既得権益が侵されるのではないかと危惧が拡がったことがある。その証左のように、一九三一年に定められた非マレー人の土地所有を制限した土地所有制限法は、インド人社会を不安に陥れた。これにより土地を抵当にマレー人に金を貸しつけていたチュティアのコミュニティは大きな打撃を受け、その結果、他のインド人コミュニティとの連携の必要性に目を開かされたと思われる。

このように一九二〇年代後半から三〇年代前半までのインド人ナショナリズム運動は市民権獲得問題に集約されており、その意味ではマラヤを向いた移民インド人のナショナリズムとこれを規定できる。

五 インドを向いた移民インド人のナショナリズム運動

(a) 労働条件改善運動

ところが、一九三〇年代後半の移民インド人の政治活動をもてみると、市民権獲得問題は陰をひそめ、代わってゴム・プランテーションに働くインド人労働者の労働条件改善運動が中心テーマとなっているのに気付かされる。活動の中心は前期と同じくスランゴール・インド人協会等をはじめとする、各地のインド人協会で、その内容は労働者の生活実態を調べた上で、彼等の生活水準や賃金、労働条件が不当に低いとし、これを向上させるよう政府に働きかけるため、インド本国のナショナリストの視察を請うという形をとっている [Selangor Indian Association, et al. 1936]。運動は一九三八年のインド国民会議派の長老 S. S. Sastri C. J. で Nehru の訪問にそのピークを迎え、同年インド政府の移民禁止令発行に伴って漸次下降していった。

従来クーリーと自らを区別することで中産階級インド人としてアイデンティティを確立し、労働者との距離をむしろおきたがっており、プランテーション労働者の生活実態には無知であった移民インド人中産階級は、なぜこの時点で急に労働者の生活改善に興味を持ったのであろうか。何を契機として、中産階級インド人のナショナリズム運動の中心テーマが

一九三〇年代前半と後半では変わったのであろうか。前期の政治運動が労働者の問題に関心を示した兆しもあった。一九二八年には政治組織のないインド人の意見を結晶化させようと全マラヤ・インド人会議(All Malayan Indian Conference : AMIC)が召集され、ここではインド人労働者の生活水準の向上がテーマの一つとして議論されている。しかし会員のほとんどは穏健な中産階級であり、彼等の本音は労働問題には関心がなかったのである。そのなよりの証左に、一九三一年第三回 AMIC 大会の開会演説での議長 N. K. Menon の「インド人労働者はヨーロッパ人に搾取されている」という演説は、メンバーにより過激すぎると批判を受け、AMIC は以後中産階級インド人の支持を失い、活動を停止してしまつた事があげられる (Arasaratnam 1970 : 99)。そのわずかな五年後、なぜ急に労働者問題が移民中産階級インド人ナショナルリズム運動の中心になってきたのか検討してみよう。

Veerasamy の言によれば、一九三〇年代前半の政治運動は二つの流れに分離してゐた (Mahajan 1960 : 124 n 68 Veerasamy のインタビュー⁽¹⁹⁾)。その一つは、一九三二年 G. V. Thayer によるマラヤ・インド人協会(MIA)設立の主旨に述べられている如く、「マラヤ・インド人の利益を新しい移民インド人から守ろう」とする派であり政治的には穏健である既成の勢力から成り立っている。第二はインド人青年協会(Young Men's Indian Association : YMIA)を設立し

た M. K. Ramachandran⁽²⁰⁾ 等にもみられるように、インドのナショナルリズム運動にひかれ、これに同化しようとする若い中産階級のインド人達である。中産階級におけるこのような対立は何に起因するのであろうか。これは対立する両インド人協会の名称の差異が明示しているように、世代の差が一因しているのではないか。一九二一年に全インド人の中でマラヤ生れのインド人の占める率は、わずか一二・四%であったが一九三一年にその率は二一・一%に増え、一九四七年には四九・八%と急速に上昇している事実がある (Mahajan : 1960 : 112)。マレー生れの人口が増えてゆくに従つて、成功した移民として既得権益を守るため、市民権を得たいと考える政治的には穏健な第一世代と、インド・ナショナルリズムに共感を示し、労働者問題に関心をもちラディカルな第二世代との価値観の違いが、政治行動の差として表出して来た事が両派の対立の根底にあったと言える。

常識的にはインドに根をもつ第一世代の方がインド志向のナショナルリズムにひかれ、西洋風教育を受けた第二世代の方がマラヤへの定着志向が強いといえそうな気がする。確かに生きてゆく場所という意味で第二世代の多くはマラヤをインドより好んでいる (Iam 1970 : 48)。しかし、母国インドの記憶を持たず、英語で教育を受けたため、インド人としてのアイデンティティは持てず、といつて移住地マラヤではない。またに市民権は認められず、また中国人に比して確固たるマ

ラヤ・インド人のコミュニティも形成されていない、という状況の中では、西欧化した第二世代が第一世代より強くアイデンティティ危機に陥る可能性は大きい。彼等がインド・ナショナリズム運動との熱狂的同一を望んだのは、このアイデンティティ危機を克服するための方法であったと考えられる。⁽²¹⁾

このような第二世代の移民インド人のインド・ナショナリズム・アイデオロギーへの同化は、エリクソンのいうネガティヴ・アイデンティティの選択とみなせよう [Erikson 1968: 176]。ネガティヴ・アイデンティティとは、青年がアイデンティティと現実の接触不良におかれた場合、そのアイデンティティ意識は入手可能な役割の中から現実感を得ようとするよりも「最も忌むべき、最も危険な、だが同時に最も現実的な、アイデンティティを倒錯的に選択することの方がた易くなる事」[草津 1970: 50]を示す状態である。第二世代のインド・ナショナリズム・アイデオロギーへの同化は、彼等がその生活史において、マラヤとも、そしてインドとも真に適應する生活条件を欠いていたことを示しているといえよう。従ってこのようなアイデンティティ意識は、現実との接触が深まるにつれて変わってゆかざるを得ないだろう。

しかし一九三〇年代前半における第一世代と第二世代の政治的対立は、第一世代をもインドナショナリズム運動へ同化させるといふ結果を生み短期間の内に解消している。すなわ

ち Sasuri への覚え書は、両派の連名により送られているのである。この第一世代の態度の変化は次の理由によるのと考えられる。

移民第一世代にとって当初の課題は、新移住空間への適應をはかることであつた。ある程度地位が安定した一九二〇年代後半から彼等のナショナリズム運動が、植民地体制に入り込むことによってマラヤにおける市民権を得ようとしたことは、この文脈で語られるものであつた。ところが、イギリスは一九三〇年代前半相繼いで彼等の期待を裏切る行動をとつたのである。一九三一年の外国人土地所有制限法は、マラヤに永住しようとしていた移民インド人に不安を与えた事は既に述べた。そして不安の中にある移民中産階級インド人にとって決定的な事が一九三六年に起つた。この年二月穩健派の代表たる Veerasamy 等は「スルタンの州で生まれた者はスルタンの臣民とすべきである」という意見書を政府に提出した。これに対して、高等弁務官の返事は以下であつた。「インド人は外人である。従つてまた、インド人に上級官吏のポストも与えることはできない」[Arasathan 1980: 80]。ますます明らかになったイギリスの政策の前に、マラヤの市民となることによりアイデンティティを獲得しようとした中産階級のナショナリズム運動は、方向をインドのナショナリズムと結びつく方へ変えていったのである。ナショナリズム運動の主要テーマが市民権問題から労働者問題へと

移っていった原因はここに求められる。移民中産階級のナシヨナリズム運動が労働問題をめぐって燃え上がったいくのは一九三六年以降の事なのである。つまり植民地政府のインド人受け入れ拒否に比例して、ラディカルなインドを向いたナシヨナリズムに追隨する意見が強くなっていったのである。

そしてマラヤのゴム・プランテーション労働者の問題は、労働者問題は中産階級の指導により解決すべきというインド・ナシヨナリズムの伝統的テーゼにのり、インドのナシヨナリスト達の気をひき、共感を呼ぶ格好のテーマとしてとりあげられたのである。

時あたかもインド・ナシヨナリズム運動の上げ潮にあり、脱インド・マラヤ志向に挫折したマラヤの中産階級インド人のナシヨナリズムは、ここでインド志向に変わっていったのである。一九三七年にはクアラルンプルにおいて最初の移民インド人の政治団体マラヤ・インド人中央協会(Central Indian Association of Malaya: CIAM)が設立された(党首はA. M. Soosay 医学博士)。そしてこれ以後CIAMの指導者達は、インド国民会議の年次大会へ出席することになったのであった[Arasaratnam 1970: 102]。

(b) インドの対応

マラヤのインド人がインドのナシヨナリズム運動を盛りあげたその時に、インド側はこれに對しどう反応したのか。インドのナシヨナリズムは従来から労働者の問題は中産階級が

彼等のリーダーとなって解決すべきとの考えがあり、その結果早くから移民の労働条件に関心が集まり、負債制の非人間性やカンガニ制の矛盾などは格好のナシヨナリストの攻撃テーマとなっていた。高まりつつあるマラヤのインド人のナシヨナリズムに促されて、インドにおけるイデオロギーをマラヤにも伝達しようという意識もあった。CIAMのメンバーがインド国民会議派の年次大会に出席するようになったのはその好例である。

しかし、互いの意識はそうであっても、それが彼等の環境の違いを考えに入れず、観念の中の母国インド(それもインド国内でさえ統一的理解のとれていないヒンドウイズム)に基づいていた以上、幻想が現実の前に崩れ落ちるのに時間はかからなかった。それは次のような過程で進行した。

一九三六年末、インド国民会議の穏健派の長老、V. S. S. Sastriはインド政府の要請を受けて、移民インド人労働者の状況を視察するためマラヤを訪問した。一月から翌三七年一月半ばまで精力的にマラヤ各地を見回り各地でマラヤのインド人代表者にあつた。このSastriに対しマラヤのナシヨナリズムを指導していた各地のインド人協会の連名で出したのが先に述べた覚え書である。これはゴム・プランテーションにおけるインド人労働者が賃金、労働条件、生活条件においていかに不当に低い状態におかれているかを述べたもので、提出者はスランゴール・インド人協会、インド人青年協

会、それに海岸地方インド人協会である [Selangor Indian Association et al 1936]。

これに対し、帰国後 Sasuri が提出したレポートを比較してみると興味深い。このレポートの中で Sasuri はマラーヤのインド人労働者の現状を賃金、労働時間、男女の比率、教育状況、医療設備等の項目に分け詳しく報じ、カンガニ制の弊害についても述べ、この制度の廃止を提案している。しかしより重要なことは、彼はマラーヤのインド人労働者の状況はそれ程悪くないとの印象を受けたという事である [Sasuri 1937]。

Sasuri のこのレポートは当然マラーヤの中産階級インド人から多くの反発が出、彼等は Sasuri は事実を正確に見ていないと抗議した [Purnar 1960: 68]。高まりゆくマラーヤの移民インド人のナショナリズムに応えてインドがマラーヤの視察を行なったことが、両者の分離の一因となっていることは実に皮肉である。そして一九三八年カンガニ制は廃止され、インド政府はマラーヤへの労働移民そのものを禁止するに至ったのである⁽²⁷⁾。以後、インドのナショナリスト側はマラーヤのインド人に対する興味を急速に失なっていくのである。Sasuri の帰国後間もなく Nehru がマラーヤを訪問し、各地でインド人から盛大な歓迎を受けた。しかしインド・ナショナリズムに酔うマラーヤ・インド人の心情とは裏腹に Nehru はマラーヤのインド人は政治に興味を持つには余りに不足な生活をしているとの所見を述べたと言われている [Gandhi 1962: 12]。

しかし、インド人がマラーヤへの関心を急速に失なっていくのに反比例して、インド志向のマラーヤの移民インド人ナショナリズム熱は、第二次大戦下におけるインド独立連盟 (Indian Independence League: IIL) 結成にまで高まっていくのである。

今、時と場所を隔てた我々がここに観察できるのは、母国と移民先の中産階級の心理のくい違いのドラマである。母国のナショナリズムに一体化しようとしたマラーヤ・インド人の動きは、インド移民禁止の一助となり、ある意味ではマラーヤ・インド人の活動の場を自らマラーヤへ限定したという結果を生んだにすぎない。マラーヤの移民インド人ナショナリズム運動は、後期もマラーヤの移民中産階級インド人に確固たるアイデンティティを与えなかったのである。

移民禁止措置を契機として、一九三〇年代後半に盛り上がったマラーヤの移民インド人のゆる労働条件改善をめざしたナショナリズム運動は沈静した。しかし消えたのではない。

前述の如く、次に移民インド人のナショナリズム運動が盛り上がり再びインド・ナショナリズムへ結びつく動きをみせるのは、日本軍のマレー半島侵入後の第二次大戦下においてである。日本軍の援助により IIL が形成され Chandra Bose の肖像画がマラーヤ中のインド人中流家庭にはられた時期である。しかし、一方 IIL を援助したその日本軍により何万という移民インド人プランテーション労働者が、泰緬鉄道建設

に狩り出され、死亡したのである。⁽²³⁾ 移民インド人労働者の間に政治意識が芽生え、各種労働組合結成の動きがみえ出したのも、日本占領下においてである [Gamba 1962: 137]。

この時期を経てなお、マラヤの移民中産階級インド人が、結果的にインドにアイデンティティを見出せなかった証左としては、戦後の移民インド人のナショナリズム運動の一八〇度転回があげられる。インドで言語ナショナリズムが強まるに従い、マラヤでのインド人ナショナリズムの志向対象が、ヒンドゥイズム主体のインド・ナショナリズムから、タミル・ナショナリズムに変るのである。Gandhi や Nehru に代って Ramasamy Naicker や C. N. Annathurai が、Tegore から Bharathidasan が、デリーからマドラスが、移民インド人の八〇%を越すタミルのヒーローとなってゆくのである [Arasaratham 1970: 130]。

この戦争中と戦後の移民インド人のナショナリズムについては資料をさらに集めた上、また稿を改めて議論したい。ここでは、移民インド人のナショナリズムがアイデンティティ獲得の要請に基づいているため、決してインド・ヒンドゥイズムに固定したものではなく、政治の状況によって移ろってゆくものであることの証左としてこれを指摘しておくに留める。

六 マラヤ・インド人のアイデンティティ模索

英領マラヤがマラヤ連邦として独立してから二〇余年たっ

た。一九六五年にシンガポールを分離独立させた現在のマレーシア政府はマレー語及びイスラム教を中核としてマレー民族意識を高め政治、経済、文化すべてにわたってマレー人優遇政策を押し進めている。これにより経済的に劣位にあり、農村社会に閉塞していたマレー人の地位を押し上げようというものである。しかし、この政策が余りに過激なマレー人中心主義となれば、現在の政府はその支持基盤を失うことになり、又経済が打撃を被ることは確かである。政府は共産主義とムスリム過激派の左右を共に切つてゆくことにより近代官僚国家を形づくろうと必死であり、国の舵取りに今のところ成功しているようにみえる。しかし一方、深刻な人種問題に起因する政治的不安定から、マレーシア社会の存立を危ぶむ者も少なくない [Myrdal 1968: 385, Rex 1970: 114]。

しかし、本稿で考察した一九二〇—三〇年代の移民インド人のナショナリズムの事例は、マラヤのコミュニケーションは少なくともインド人側から見ると、決して深いものとはいえないことを示している。ナショナリズムを指導した中産階級インド人が何よりも望んでいたことは、マラヤでの安定した生活を享受し、かつそれを子孫に残すためにこの国に根を持つことであった。すなわちスルタンの臣民として市民権を認められることが、ナショナリズム運動前期の第一問題であったのであり、インドの独立運動に一体感を見出すことではなかった。この段階では彼等は、経済的理由にもとづい

て政治的アイデンティティをマラヤに求めたのである。しかし当時の移民インド人の文化的アイデンティティはそれぞれの出身民族のカースト、言語、生活習慣、宗教にあり、インドにおける各出身地のインド人との文化的近さは否定できない。しかしマラヤの移民インド人が求めた国籍の取得は政治上の問題であり、法律のテクニクにより短期的に処理し得る。ここで彼等は明らかに政治的アイデンティティと文化的アイデンティティとを分離して考えていた。

インドにおけるナショナリズムがマラヤに移民したインド人の政治活動の中でクローズアップされてきたのは、彼等スルタンの臣民としての市民権取得が拒否され、上級官吏への参加も外人だからという理由で拒否されて以後である。こうして移民のナショナリズムは仕方なくインドへ目を向けたが、この段階で彼等にとってインドとは何であったのであろうか。特にマレー生れの英語で教育を受けた第二世代のインド人にとって、当時のヒンドゥ・ナショナリズムがどれ程我が身のものと感じられたのだろうか。いまだかつて「インド」という政治的文化的統一体さえなかったのである。結局移民先の政治により拒否された彼等にとって「インド」とは自己の安定喪失への恐れが生み出した実体のないイメージとしての「母なる故郷」にすぎなかったのである。しかし、実際に無知であるがこそ、心情に強く訴えるものがあつたのであろう。

しかし、この段階ですでにイメージの「母なるインド」との同化の限界を感じさせられた中産階級インド人のナショナリズムは、インドとマラヤ双方からの拒否にあり、第二次大戦直後彼等はそのアイデンティティ獲得の運動をタミル・ナショナリズムへと変化させ、タミル文化の中に見出そうと努力するのである。

こうしたナショナリズム運動の振幅の激しさは移民インド人が本国の政治動向に一体感を見出していたからではなく、受け入れてくれる「母」を求めての政治的アイデンティティ模索の道程であつたといえよう。一九二〇—三〇年代のインド人のナショナリズムを検討した限り、エスニック集団間紛争の根は所属する集団の血や文化の違いの問題に関わっているよりむしろ、移民した人々が政治的アイデンティティをどこに持つかの選択の問題に関わっていることに注目したい。

すでに一九五五年一月二日 Nehru は MIA の G. A. [have] に宛て次のような手紙を送っている。「マラヤのインド人とインドの情況は全く違っている。マラヤのインド人は中国人、マレー人と手を結ぶべきである」[Malayan Indian Congress]。結局マレーシアのインド系住民はマラヤ・インド人、すなわちマレーシア人以外の何者でもないのである。

七 エスニシティとアイデンティティ

人間はその生涯を通じて、常に家庭、階級地域社会及び国

家という地理のない歴史の一貫性のある集団に分類される。そしてそれぞれの集団に所属することにより、はじめて生物学的な「ヒト」から「人間」として社会的意味を与えられ、自我も安定する。そして地球上に現存する様々な諸集団は、それらに個々の体験の積み重ね―歴史意識―を持つことにより、自己を他と区別し、集団としてのアイデンティティを確認しているのである。

しかしこの集団アイデンティティは無条件にエスニックな集団と同化するものではない。確かにエスニシティは「理屈ぬきの所与」と思われる程一見強固にみえる。しかし本稿で考察した如く、マラヤ、インド、タミルとめまぐるしくナショナルリズム運動の対象をかえた移民インド人のナショナルリズムはエスニシティとは明らかにある特定の政治状況下によるアイデンティティ選択の結果であることを明示している。マラヤ・インド移民は政治状況により、マラヤ人であり、インド人であり、又タミル人たりえるのである。

又各エスニックな集団内部では労働者、中産階層という階層対立があり、エリート達は現在のマレーシアの政党連合 *Barisan Nasional* (National Front) にみられる如く、エスニシティの差異を乗り越え、自らの階層の利益を守るため協合できるのである。

こうした観点からみると、エスニシティこそ近代化の過程に伴って故郷を喪失した人々の統合過程における安全を保障

してくれるシュルターであり、多元社会を目指す脱国家中心主義の創造的形態だと解釈する視点〔石川 1983: 338-39〕は状況の中で可変してゆくエスニシティの実態に余りにナイーブであると思わざるを得ない。

歴史の中の人間の行動は一つの概念によってすべて解明されるには余りに複雑であり、エスニシティを一枚岩の固定した分析概念と考えることは、民族国家観が第三世界の歴史のダイナリズムを捉えきれないのと同じ轍を踏むことに陥るばかりか、紛争の激化を煽りかねない。筆者はしかしエスニシティの枠組そのものに反対するものではない。確かに第三世界における紛争の多くがエスニックな紛争に起因している。しかし、それらエスニックな単位の多くは所与のものではなく、特定の状況下で選択された集団的アイデンティティの枠組であり、エスニシティとは単なる「*Primordial Sentiment* (原初的感情)」〔Geertz 1963: 109〕に基づく不変の概念ではないことを指摘しておきたい。

人間は民族国家の成立以前も存在していたし、民族国家が消滅した後も存在し続けるであろうと述べた政治学者学ドイチチュ(23)の言を流用させてもらえば、人間集団は現在所与と考えられているエスニシティ以前にも存在していたし、又そのエスニシティ以降にも存在し続けるのである。

表 I



[Mahajani 1960 : 103, 104]

注

- (1) 原語はアラビア語の *da'wa*, で伝道活動の意。
- (2) 一九六九年の総選挙で保守系の連盟党の勢力は後退し、中国系中心の野党の民主行動党や中道革新系の人民運動党が伸長した。連合党政権下で特別の権利を保証されてきたマレー人が不安感を深める一方、逆に連合政権下で抑圧されてきた中国系の意気は上がり、その勢いに乗ってマレー人の不安を増幅させる無謀な行動に出た。その結果怒り狂ったマレー人群众は、報復として中国系住民を襲撃し、流血の惨事となった。六〇〇〇名が避難し、死亡者は一七八名と公表された。
- (3) エスニシティ理論では、第二次大戦後続々と独立した旧植民地において、一九五〇―六〇年代の近代化理論―交通・通信網の拡充発達が社会の多様な部分の結合を緊密化し地域内の文化格差を減少させ共通のアイデンティティの確立を促す―の当初の予想に反しエスニシティは消滅するどころか新たな紛争の源泉となっている事実から、国際政治を分析する際の集団単位としてエスニシティに注目している。エスニシティについては Walker Connor, "Nation-Building or Nation-Destroying?" *World Politics*, XXIV No. 3 (1972), Cynthia Enloe, *Ethnic Conflict and Political Development* (Boston, 1973); N. Glazer and D. P. Moynihan, eds. *Ethnicity: Theory and Experience* (Cambridge, 1975) 等を参照された。
- (4) マレー人のナショナルリズムについては [Roff 1974] を参照
- (5) 文化変容による精神病理については [荻野 1981] の症例が参考になる。
- (6) イギリス植民地体制下、マラヤ地域は直轄の海峡植民地 (S. S.) とベラツ、スランゴール、スグリンスピラン、パハンのマラヤ連邦州 (F. M. S.)*、クダー、クランタン、トレンガス、ブルリスのマラヤ非連邦州の三つの異なる統治形態下におかれた。本稿で考察するのはマラヤ連邦州のインド系住民に

ついてである。

- (7) 一九一三年のイギリス人投資家によるゴム・プランテーションへの投資額は四千万ポンド、一九二三年にはその額は一億ポンドに増加している。
- (8) 一八世紀前半までのマレー半島の推定人口は三〇万を下るとされている ([Dupuis 1972: 87]). この数字が適正であるかどうかの実証は不可能であるが、ともかく非常に少なかったことは確かである。マラヤで初めて国勢調査が行われたのは一九二一年でこの時の総人口は三三〇万強であり、いかに植民地体制下急激に人口が増したかがわかる。
- (9) 当時必要のあった北インド諸民族とは、バンジャブ、ラージプート、パターン (パンジュトクン) マハラシュトラなどである。本稿で南インドとは今日のアンドラ・プラデーシュ、タミルナドゥ (マドラス)、マイソール、ケーララ州を示し、その他のインド地域及びパキスタンを北インドとする。
- (10) この制度は黒人奴隷廃止 (一八三八年) 後、イギリス植民地、保護領で広く行われた労働力供給法であり、マラヤの他アフリカ各地、フィジー、西インド諸島にもこの制度で労働者が送られた。これはクローリー貿易とよばれ、形式上は契約であるが、実際は準奴隷貿易であり、クローリー貿易者は誘拐に近い形で人集めをしたようである。因みにクローリー (苦力) はタミル語で労働者の意味である [Sandhu 1969: 79]。
- (11) カンガニとはタミル語で親方を意味する。移民労働者の中でも比較的高いカーストに属する大家族の長で、出身村の他のカーストにも影響を及ぼし得る者がカンガニとなった。このシステムも労働者が特定のカンガニに属し、搾取を受けるとして後インド・ナショナルリストの標的となる。
- (12) インド人エステート労働者の男女比 [Mahajan 1960: 112]。

(Per
Thousand)

(13) まずインドでは、ナガバットティナムに集留された移民はマドラス管区政府から姓名、性別、出身地、宗教、カースト、身体的特徴を記載した証明書の発行を受ける。マラヤ側では、ベナンとスウェッテナム港に作られた移民集積地で、労働監督官が移民の健康、契約条件などを検査し、その後各プランテーションへ配分された。なお日当賃金は一九二〇年代では最低四〇—五〇セントの間で定められている。—マラヤ・ドルーニシリンドグ四ペンス。

(14) セイロン・タミル人は北セイロンのジャフナ地方を出身とするため、ジャフナ・タミルともよばれ、南インドから紀元前二世紀頃より断続的にセイロンに移民したタミル人である。しかし、インド亜大陸のタミル人とセイロン・タミル人は同じタミル人であるという意識より、異なるコミュニティに属するものと互いに考えている。この感情を無視してイギリス植民地政府はセイロン・タミル人をもインド人のカテゴリーに入れたため、両コミュニティからの反発を招くのである。又セイロンにおいてもセイロン・タミルと土着シンハリの間の紛争は現代スリランカの深刻な政治問題となっている。

(15) Mahajani は移民インド人中の商人の割合は四割に過ぎないとして、[Mahajani 1960: 95]。これに対し Sandhu は三五%の非労働者移民の大部分は商人に属すと述べている [Sandhu 1970: 117]。この違いは Sandhu が行商人や物売り等の小商人階級に入れているため出てきたと思われる。なおチュティアを回教徒と規定している本もある [須山 1962: 316] がこれは誤りである。

(16) 一九三二年の一〇〇エーカー以上の二三〇一にのぼるゴム園

の所有者の内、ヨーロッパ人七五%、インド人は三%で一七万五千エーカーを所有している [Mahajani 1960: 100]。

(17) 移民インド人口の九六%は S・S・F・M・S のマレーシア西岸に片寄っている。一九三一年ではこの内の都市住民は三〇・五% (一九四七年 三九%) で、その内五四%がベナン、クアランプル、シンガポールに集住している [Mahajani 1960: 113]。[Sandhu 1969: 216]。

(18) 協会が機関紙を発行するようになったのは、シンガポール・インド人協会が一九二五年、スランゴールは一九三二年からである。

(19) かくて Mahajani は Veerasamy を初代の C I A M 党首と紹介しているが、Arasaratnam とよれば初代党首は Soosay である [Arasaratnam 1970: 98]。

(20) Ramachandran はまたハリジャンの地位向上を目ざし Adi-Dravida Sangam を設立した社会改革運動家である。

(21) 第二世代について次の事も考慮すべきであろう。労働移民が家族連れの場合、彼等の最大の夢は子弟に教育を受けさせ、より上層階級へ昇らせることであった。カーストで縛られたインドでは不可能だが、新聞地マラヤでは可能だった。裏付ける資料は見当たらないが実際一九三〇年代には彼等の子弟の内には中産階級として都市に流入し始める者が出てきていると推測される。

(22) この措置をマラヤのインド人ナショナルリズムの要請に基づくものと解釈する説もある [生田 1977: 296]。しかし労働移民禁止の直接の原因は、インド政府とマラヤの植民者間でプランテーション労働者の最低賃金をめぐって対立があり、妥協が成立しなかったためである [Parnar 1960: 70—78]。

(23) 鉄道建設にマラヤから送られた七万四千人の労働者のほとんどは南インド人であった。この内二万五千人が死亡、五千人が逃亡、一万二千人が帰国し、残りの三万二千人については不明とされている (しかしこの大部分は死亡したものと推定され

90) [Gamba 1962: 14].

(24) 独立後今日まで一貫して与党の座にある連盟党(今日の國民戦線)は、この国の上層階級を代表する三つのコミューナルな政治団体、①統一マレー人全国組織(UMNO)②マレーシアインド人会議(MIC)③マレーシア中国人公会(MCA)の妥協の上に成り立ち主導権はUMNOによって掌握されている。連盟党は三つの政治団体の利害を調節し妥協をはかることを建前としているが、実際はマレー人優遇政策が推進されている。しかしこの政策が余りに過激になればMIC、MCAの支持を失い、それは直ちに急進的マレー人政党的前進を許しUMNOの政策掌握自体が脅かされると言うシレンマがある。

(25) 彼の理論については Deutsch, Karl W. *Nationalism and Social Communication* (Cambridge, 1953), *Nationalism and Its Alternatives* (New York, 1969) 等を参照せよ。

引用文献

- Arasaratnam, Sinnapah. 1970. *Indians in Malaysia and Singapore*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- デブナ・イン・ジャマター 一九七五『ミンガホルネン・イン・シネガ』黒沢一見訳 東京 白水社 ショッピング文庫(原書 Dupuis, Jacques. 1972. *Singapore and Malaysia*. Coll. Que Sais-je? presses Universitaires de France.)
- エリック・ノット・エリック H・一九七〇『幼児期と社会』全三巻 東京 マチヤ書房(原書 Erikson, Erik H. 1950. *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton & Company.)
1968. *Identity: Youth and Crisis* New York: W. W. Norton & Company. (武蔵庸理訳 一九六九『主体性(青年と危機)』東京 北星社)
- Gamba, Charles. 1962. *The Origins of Trade Unionism in Malaya*. Singapore: Eastern University.
- Geertz Clifford. 1963 "The Integrative Revolution," in

C. Geertz (ed), *Old Society and New States*. Glencoe: the Free Press.

萩原宜之、高橋彰 一九七二『東南アジアの価値体系4(マレーシア・フィリピン)』東京 現代アジア出版会

萩原宜之 一九六八『マレーのコミュニナリズムと国民的統合』国際政治 三六号 二七四-四四頁

生田滋、池端雪浦 一九七七『東南アジア現代史Ⅱ(フィリピン・マレーシア・シンガポール)』世界現代史6 東京 山川出版社

石川一雄 一九八二『国家建設とエスニックな紛争』中川原徳仁、黒柳米司編『現代の国際紛争』第七章 二二六-二四〇頁

東京 人間の科学社

Jain, Ravindra K. 1970. *South Indians on the Plantation Frontier in Malaya*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.

Kondapi, C. 1951. *Indians Overseas, 1838-1949*. New Delhi: Indian Council of World Affairs.

Mahajani, Usha. 1960. *The Role of Indian Minorities in Burma And Malaya*. Bombay: Vora & Company Publishers.

Myrdal, Gunnar. 1968. *Asian Drama*. Vol. 1 New York: Pantheon.

Nair, M. N. 1937. *Indians in Malaya*. n. p.

荻野恒一 一九八一『文化摩擦と精神病理』東京 新曜社

Parmer, J. Norman. 1960. *Colonial Labor Policy and Administration: A History of Labor in the Rubber Plantation Industry in Malaya, c. 1910-1941*. New York: Association for Asian Studies.

Rex, John. 1970. *Race Relations in Sociological Theory*. Weidenfeld.

Roff, William. 1974. *The Origin of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.

- Sandhu, Kernal Singh. 1969. *Indians in Malaya: Some Aspects of Their Immigration and Settlement, 1786-1957*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sastri, V. S. Srinivasa. 1937. *Report on the Condition of Indian Labour in Malaya*. Kuala Lumpur: Proceedings of the Federal Council.
- Selangor Indian Association; Young Men's Indian Association; Coastal Indian Association. 1936. *Memorandum to V. S. Srinivasa Sastri*. Kuala Lumpur: n. p.
- 重松伸司 一九七六「一九二〇年代マラヤ連邦州における移民・労働政策」『アジア研究』(アジア政経学会) 第二三卷一号 五七一—八三頁
- 須山卓 一九六二「マラヤの印僑社会と経済」『マラヤの華僑と印僑』二九—三二八頁 アジア経済研究所調査報告第8集 東京 アジア経済研究所
- Thompson, V. M.; Adloff, R. 1955. *Minority Problems in South East Asia*. Stanford: Stanford University Press.
- 柳沢悠 一九七六「南インドにおける地主—小作関係の展開」『インド史における村落共同体の研究』辛島昇編 二三九—二六五頁所収 東京 東京大学出版会